処方番号：183B　　**処方名**：加味平胃散（かみへいいさん）

処方構成：
蒼朮 4-6（白朮も可）、陳皮 3-4.5、生姜 0.5-1（ヒネショウガを使用する場合 2-3）、神麹 2-3、山査子 2-3、厚朴 3-4.5、甘草 1-1.5、大棗 2-3、麦芽 2-3　（山査子はなくても可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、胃がもたれて食欲がなく、ときに胸やけがあるものの次の諸症

効能・効果：
急・慢性胃炎、食欲不振、消化不良、胃腸虚弱、腹部膨満感

原典：医方考
出典：方函口訣（古今方函）

解説：
平胃散に神麹、麦芽、山査子を加えたものである。医方考の処方とされるが、原方には山査子が配合されていない。不摂生な食事などによる消化不良、食欲不振などに消化促進剤的に用いる平胃散である。
朮は蒼朮を使用することが望ましい。

183B加味平胃散

参考文献名		朮	厚朴	陳皮	甘草	生姜	大棗	神麹
医方考　巻之四傷食	注1	—*1	–	–	–			–
医方集解　巻下之三	注2	2銭*1	1銭	1銭	1銭	–	–	—*2
中国大辞典　一冊	注3	6分*1	6分	4分	2分	3片		
診療医典	注4	4*1	3	3	1	2	2	2
臨床提要　上	注5	–	–	—*8	–			–
処方解説	注6	4*1	3	3	1	1*7	2	2
医学処方解説	注7	6*1	4.5	4.5	1.5	3	3	3
処方分量集		4*1	3	3*8	1	1*7	2	2
黙堂柴田良治処方集		3蒼朮	3	3	2	1 乾生姜		2

参考文献名		麦芽	山査子	枳実	青皮	香附子	縮砂	川芎
医方考　巻之四傷食	注1	–						
医方集解　巻下之三	注2	–		(–)				
中国大辞典　一冊	注3	4分	6分*3	–	4分	4分*4	4分*5	4分*6
診療医典	注4	2						
臨床提要　上	注5	–	–					
処方解説	注6	2	2					
医学処方解説	注7	3	3					
処方分量集		2						
黙堂柴田良治処方集		2						

*1　蒼朮　*2　または炒麹　*3　山査肉　*4　香附米　*5　砂仁　*6　小川芎　*7　乾生姜　*8　橘皮

注1　宿食不化，呑酸呃臭，右関脈滑，此方主之，食経宿而不化，有熱則令人呑酸，無熱則但呃臭而已，右関主脾胃，脈滑主停食，治此者宜寛中下気，徒脾，消食辛者可寛中，故用蒼朮陳皮，苦者可下気，故用厚朴，甘者可徒脾。

故用甘草，盒造変化者能消食，故用神麹麦芽。

注2　平胃散：傷食加神麹麦芽或枳実。　本方加麦芽炒麹，名加味平胃散，治宿食不消呑酸噯臭。

注3　加味平胃散之第二方：験方。㊞治傷食吐瀉。清水一鐘半。煎至七分。分二三次緩緩服。

注4　平胃散に麦芽，神麹各2を加える。

注5　加味平胃散は朮，厚朴，橘皮，甘草，神麹，麦芽，山査子からなる。　本間棗軒内科秘録，傷食の條下にいわく。…傷食の後脾胃が衰え，消化が悪く，微に飲食しても心下飽悶して飢餓の感を訴えることなく，噫気呑酸等の出る者には加味平胃散がよい。

注6　消化不良，食欲不振によい。

注7　平胃散：神麹，麦芽，山査ヲ加ヘテ加味平胃散ト名ク。

処方番号：183C　　**処方名**：不換金正気散（ふかんきんしょうきさん）

処方構成：
蒼朮 4（白朮も可）、厚朴 3、陳皮 3、大棗 1-3、生姜 0.5-1（ヒネショウガを使用する場合 2-3）、半夏 6、甘草 1.5、藿香 1

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、胃がもたれて食欲がなく、ときにはきけがあるものの次の諸症

効能・効果：
急・慢性胃炎、胃腸虚弱、消化不良、食欲不振、消化器症状のある感冒

原典：太平恵民和剤局方
出典：

解説：
(1)平胃散に藿香、半夏の 2 味を加えた方。その原典は『和剤局方』傷寒門である。(2)これによると「四時の傷寒、瘴疫時気、頭痛壮熱、腰背拘急、五労、七傷、山嵐瘴気、寒熱往来、五隔、気噎、咳嗽痰涎、歩行喘乏するを治す。或は霍乱吐瀉、臓腑虚寒、下痢赤白並びに宜しく之を服すべし」　「若し四方の人、水土に伏せず、宜しく之を服すべし、常に服すれば能く嵐気を避け、脾胃を調和し飲食を美くす」とある（3）本方は平胃散の証にさらに外感（外邪によって起こった病気、感冒、腸チフス、インフルエンザなどをいう）を兼ねたものに用いる。
朮は蒼朮を用いることが望ましい。

183C.不換金正気散

参考文献名	朮	厚朴	陳皮	大棗	生姜	半夏	甘草	藿香
処方分量集	4	3	3	1	1	6	1.5	1.5
診療医典	4	3	3	3	3	6	1.5	1
後世要方解説　注1	4	3	3	2	2	6	1.5	1
応用の実際	–	–	–	–				
漢方あれこれ	–	–	–	–				

注1 (1)遠隔地に旅行して水毒に中り，吐瀉するもの，あるいは湿地に露営し，河川を渡りなどして，悪寒発熱身体沈重するものなどに用いる。あるいは新築家屋に入って壁湿に中ったものなどによい。(2)水あたり，所謂不潔の飲料水，遠隔地の水にあてられた胃腸炎によい。

処方番号：184　　**処方名**：防已黄耆湯（ぼういおうぎとう）

処方構成：
防已 4-5、黄耆 5、白朮 3（蒼朮も可）、生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 3）、大棗 3-4、甘草 1.5-2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、疲れやすく、汗のかきやすい傾向があるものの次の諸症

効能・効果：
肥満に伴う関節痛、むくみ、多汗症、肥満（筋肉にしまりのない、いわゆる水ぶとり）

原典：金匱要略
出典：

解説：
表が虚し、下焦が虚し、湿（水毒）があって、腎の障害によっておこる諸症で、体表に水毒が停滞し、下肢の気血がめぐらない、冷えのぼせで多汗症で、水肥りで、関節にも水腫があり、疼痛を伴うものに用いられる。一般に色白で水ぶとり体質の人に用いられることが多い。主薬防已と黄耆にさらに利水剤の朮が加わっているが、発表が活発に行われず、尿量が少ないので、尿利をさかんにして、多汗浮腫とそれに伴う疼痛を緩解する。陽証で足冷を訴えるので、脈は浮であるが、浮弱数を呈する。

184.防已黄耆湯

参考文献名		防已	黄耆	朮	生姜	大棗	甘草	用法・用量
診療の実際	注1	5	5	3	3	3	1.5	*1
後世要方解説	注2	5	5	3	1	3	1.5	*2
明解処方	注3	5	5	3	1.5	3	1.5	*1
基礎と診療	注4	1	1.1	0.8	0.8	0.8	0.5	
漢方入門講座	注5	4	5	3	3	4	2	
漢方医学	注6	4	5	3	3	3	1.5	
治療の実際	注7	5	5	3	3	3	1.5	
漢方診療医典		5	5	3	3	3	1.5	

*1　生姜は*2以外の処方はひね生姜
*2　生姜は乾生姜(日局)を使用

注1　色白で肉軟かい水ぶとり，疲れやすく汗多い人。下肢に浮腫あるもの，膝関節炎，肥満症，関節炎，下腿潰瘍，通経。脉多くは浮弱。有閑婦人で肥えた人に多い。

注2　体表に水毒があり，しかも表が虚し，下肢の気血めぐらざるもので，次のような症例に用いることが多い。(1)感冒後皮膚のしまりが悪く，熱が去らず，悪風があって自汗が止まらず，頭痛，身体疼痛し，小便不利のもの。(2)腎炎，ネフローゼ，妊娠腎，陰嚢水腫。(3)癰，瘤，筋炎，下肢骨カリエス，膝や趾の関節炎，潰瘍，浮腫。(4)肥満症で筋肉軟かく，水ぶとりのもの。(5)皮膚病，蕁麻疹，多汗症，わきが。(6)冷え症，気鬱，月経不順。(7)変形性膝関節炎。

注3　多汗体質，水肥り(色白く筋肉柔軟)，足冷，脉は浮脉，関節水腫を必須目標とし，また尿量減少，肩こり，疼痛は軽度，貧血，軽度の口渇を確認目標とする。リウマチ性関節炎，脚気，多汗症，湿疹，肥満症に応用される。本方の浮腫は腎性でないため，蛋白尿を認めないのを原則とする。

注4　水肥りの薬。肥満症でからだが重く色が白く，肉やわらかくつかれやすく，汗かきで小便の出方の少ない人。

注5　脉浮弱数，汗出悪風，腰重く痛むもの。坐骨神経痛，腰痛，筋痛，関節痛，浮腫，化膿症，肥満，月経不順，冷え症。

注6　色が白く肉が軟かく水ぶとりの体質で，つかれやすく　汗の多く出る傾向のある人の関節がはれ屈伸の不自由なもの，肥満症，関節炎，多汗症，下肢の潰瘍。

注7　この方剤を用いる目標は筋肉が軟かくぶくぶくしている俗に水ぶとりの傾向があって，すぐに疲れるものである。変形関節炎に著効があり，膝関節に水がたまっている時でも，リウマチ性の関節炎にも用いる。下半身に浮腫が多く，足が重いというものによい。

処方番号：185　　**処方名**：防已茯苓湯（ぼういぶくりょうとう）

処方構成：
防已 2.4-3、黄耆 2.4-3、桂枝 2.4-3、茯苓 4-6、甘草 1.5-2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、手足のむくみや冷えやすい傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：
手足の疼痛・しびれ感、むくみ、めまい、慢性下痢

原典：金匱要略
出典：

解説：
防已黄耆湯の類似方であり、浮腫に用る薬方である。用法は水はけの悪い水っぽい虚状を帯びた体質である者の皮膚下の水滞、すなわち皮下に停水があり、表と下焦が虚して下肢の血、気が停滞するため、むくみ、疼痛、冷え、しびれ、等や水証を呈する者に用いる。
『方函類聚』に「此方皮水を主とす、一人身体肥胖運動意の如ならず、手足振棹する者此方にて愈、又水腫腹堅硬是を按ずるに潤澤なく、譬えば革袋に水を盛て其上をさする如くかさかさして堅く腫るは陽気の脱なり、此方に附子を如えて効を奏す」とある。

185.防已茯苓湯

参考文献名	防已	黄耆	桂枝	茯苓	甘草
処方分量集	3	3	3	4	1.5
診療医典	3	3	3	5	1.5
症候別治療	3	3	3	6	2
処方解説　注1	3	3	3	6	2
明解処方	3	3	3	6	2
漢方処方集	3	3	3	6	2
漢方治療提要	2.4	2.4	2.4	4.8	1.6
金匱要略入門	3	3	3	6	2
漢方入門	3	3	3	6	2

注1　陰証で四肢の浮腫，上衝，疼痛，あるいは麻痺シビレの症状があり，冷感を訴え，貧血するものを目標とする。

勿誤方函口訣には,「此方ハ皮水ヲ主トスレドモ，方意ハ防已黄耆湯ニ近シ。但シ朮ヲ去ツテ桂枝，茯苓ヲ加フル者ハ，皮膚ニ専ラニユクナリ。一人身体肥胖シ運動意ノ如クナラズ，手足振掉シ前医苓桂朮甘，真武ノ類ヲ投ジ，或ハ痰ノ所為トシテ導痰ノ薬ヲ服セシメ更ニ効ナキ者此方ニテ愈ユ。又下利久々治セズ，利水ノ薬ニテ愈エガタキ者，此方ヲ用イテ意外ニ治スルコトアリ」とある。

注2　皮水の証候複合は，四肢は浮腫し，水腫は皮下組織にあり，四肢の筋肉が(水のため圧せられて）痙攣的に収縮する場合は，防已茯苓湯の本格指示である。

処方番号：186　　**処方名**：防風通聖散（ぼうふうつうしょうさん）

処方構成：
当帰 1.2、芍薬 1.2、川芎 1.2、山梔子 1.2、連翹 1.2、薄荷葉 1.2、生姜 1.2、荊芥 1.2、防風 1.2、麻黄 1.2、大黄 1.5、芒硝 1.5、白朮 2、桔梗 2、黄芩 2、甘草 2、石膏 2-3、滑石 3-5
（白朮のない場合も可）

用法・用量：
原則として湯
（１）散：1 回 2g　1 日 3 回
（２）湯

しばり：
体力充実して、腹部に皮下脂肪が多く、便秘がちなものの次の諸症

効能・効果：
高血圧や肥満に伴う動悸・肩こり・のぼせ・むくみ・便秘、蓄膿症、湿疹、ふきでもの、肥満症

原典：宣明論の中風門
出典：

解説：
(1)原典によると、「中風、一切の風熱、大便閉結し、小便赤渋、頭面瘡を生じ……などの症を治す。(2)本方の大黄、芒硝、甘草は調胃承気湯で、胃腸内の食毒を駆逐する。防風、麻黄は皮膚を開達して病邪を発散し、桔梗、山梔子、連翹は解毒消炎の能がある。荊芥、薄荷葉は頭部の熱を清解し、白朮は滑石とともに水毒を腎、膀胱より排泄する。黄芩、石膏は消炎鎮静的に作用し、当帰、芍薬、川芎は血行を調整する。このような体質のものはアチドージスの傾向が強く、本方はこれをアルカロージスにする働があるものと解釈されている。

186.防風通聖散

参考文献名		当帰	芍薬	川芎	山梔子	連翹	薄荷葉	生姜	荊芥	防風
処方分量集		1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
診療医典	注1	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
応用の実際	注2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
後世要方解説	注3	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
漢方あれこれ		1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
明解処方		1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
漢方医学[創元医学]		1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2

参考文献名		麻黄	大黄	芒硝	白朮	桔梗	黄芩	甘草	石膏	滑石
処方分量集		1.2	1.5	1.5	−	2	2	2	2	3
診療医典	注1	1.2	1.5	1.5	2	2	2	2	2	3
応用の実際	注2	1.2	1.5	1.5	2	2	2	2	2	3
後世要方解説	注3	1.2	1.5	1.5	2	2	2	2	2	3
漢方あれこれ		1.2	1.5	1.5	2	2	−	2	2	3
明解処方		1.5	1.5	1.5	2	2	2	2	2	3
漢方医学[創元医学]		1.2	1.5	1.5	2	2	2	2	2	3

注1 肥満症で実証の中風体質者に最もしばしば用いられる。腹は臍を中心として膨満し，いわゆる重役型の太鼓腹を呈するものに用いてよい。いかに血圧が高くとも，痩せ型で顔色の蒼白なもの，腹筋拘攣し，また，はなはだしく弛緩しているものには用いてはならない。また本方を服用して著しく食欲が衰え，あるいは不快な下痢を起こすものにまた禁忌である。

注2 本方は肥満卒中体質の者に用いられることが多く，食毒，水毒その他一切の自家中毒が停滞して，種々な病変を呈するものを発汗，利尿，便通などによって諸毒を排泄し解毒する作用がある。応用としては肥満体質，常習便秘，高血圧，中風の予防，脳溢血，頭瘡，丹毒，脱毛症，糖尿病。

注3 脳溢血，中風の予防，慢性腎炎，頭瘡，丹毒，禿頭，痔疾，皮膚病，坐骨神経症，蓄膿症，喘息，糖尿病，脚気，高血圧，肥満，常習性便秘。

処方番号：187　　**処方名**：補気健中湯（補気建中湯）（ほきけんちゅうとう）

処方構成：
白朮 3-5、蒼朮 2.5-3、茯苓 3-5、陳皮 2.5-3.5、人参 3、黄芩 2-3、厚朴 2、沢瀉 2-3、麦門冬 2-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で胃腸が弱いものの次の諸症

効能・効果：
腹部膨満感、むくみ

原典：寿世保元
出典：

解説：
原方の『済生方』と『後世要方解説』、『診療医典』は補気健中湯とし建でなく健を用いている。本方は四君子湯と平胃散を合方して甘草を去り、黄芩、沢瀉、麦門冬を加えたものである。

187.補気健中湯

参考文献名		朮	茯苓	陳皮	蒼朮	人参	黄芩	厚朴	沢瀉	麦門冬
処方分量集		3	3	2.5	2.5	3	2	2	2	2
診療の実際		記載なし								
診療医典	注1	4(白)	4	3	3	4	2	2	2	2
漢方百話		5(白)	5	3.5	3.5	3	3	2	2	2
後世要方解説	注2	4(白)	5	3	3	3	2	2	3	3
応用の実際	注3	4(白)	5	−	3	3	2	2	3	3
漢方あれこれ		4 オケラ	4	1 キッピ	−	1.5	2.5	2	4	8
明解処方		記載なし								

注1 虚証の浮腫，腹水，鼓腸に対して，ときに大効をとることがある。実腫のときには柴苓湯，分消湯，五苓湯，木防已湯などを用いるか，虚証で元気衰えたものには本方がよい。あるいは小建中湯や補中益気湯などの甘味の剤を与えてかえって浮腫が増加したときも本方を用いるとよい。

注2 この方は鼓腸，腹水を治し，時に妙効を発揮することがある。中を補い小便を利する効がある。肝硬変症，慢性腹膜炎，ネフローゼ等による腹水の中，分消湯，木防已湯，その他の薬方にて効なきものに試用する。また，脾胃の虚したものに小建中湯，補中益気湯の類を与えて浮腫，腹水を発したときに用いるとよい。腹水，浮腫，鼓腸，肝硬変症等に応用。

注3 虚証の鼓湯，腹水，浮腫に用いる。全身の元気が衰え，浮腫は弾力がなく軟弱で圧迫した凹みがなかなか元にもどらない。本方の適応するものは，分消湯，五苓散，木防已湯などが用いられない虚証である。したがって体質が虚弱なものや病気が慢性になって，実証に用いる処方を用いる機を失ったものに用いられる。

処方番号：188　　**処方名**：補中益気湯（ほちゅうえっきとう）

処方構成：
人参 4、白朮 4（蒼朮も可）、黄耆 3-4、当帰 3、陳皮 2、大棗 2、柴胡 1-2、甘草 1-1.5、生姜 0.5、升麻 0.5-1

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で元気がなく、胃腸のはたらきが衰えて、疲れやすいものの次の諸症

効能・効果：
虚弱体質、疲労倦怠、病後・術後の衰弱、食欲不振、ねあせ、感冒

原典：弁惑論（李東垣）・内傷門
出典：

解説：
(1)本方の別名を医王湯というのは補剤の王者たる効があることによる。(2)本方の原典は『弁惑論』（李東垣）・内傷門である。(3)この方剤は中を補い気を益す効がある意味で補中益気湯の名がある。(4)小柴胡湯の証より虚候を帯びたものに用いるがその順は小柴胡湯→柴胡姜桂湯→逍遙散→補中益気湯。(5)人参、朮、陳皮、甘草は健胃強壮の効力があり、黄耆、当帰は皮膚の栄養を亢めて盗汗を治し、柴胡、升麻は解熱の効がある。生姜、大棗は諸薬を調和し薬効を強める。(6) 効能効果で示す感冒は高齢者や体力虚弱なもののこじれたもの。(7) 朮は白朮が望ましい。

188.補中益気湯

参考文献名		人参	朮	黄耆	当帰	陳皮	大棗	柴胡	甘草	乾生姜	升麻
処方分量集		4	4	4	3	2	2	1	1.5	0.5	0.5
診療の実際	注1	4	4	4	3	2	2	2	1.5	2生	1
応用の実際		4	4(白)	3	3	2	2	2	1.5	2生	1
後世要方解説	注2	4	4(白)	4	3	2	1.5	1	1	1.5	0.7
漢方あれこれ		3	3	4.5	3	3	3	2	2	−	2
明解処方		3	3(白)	3	3	2	2	2	1.5	2生	1
漢方診療医典		4	4	4	3	2	2	2	1.5	2生	1
漢方診療のレッスン		4	4	4	3	2	2	2	1.5	0.5生	1

注1 疲労しやすく，腹壁の弾力の乏しい虚証のものに用いる。虚弱者の感冒，胸膜炎，肺結核，腹膜炎，夏やせ，病後の衰弱，脱肛，陰萎，半身不随，多汗症などに応用される。

注2 病後の疲労，夏痩せ，肺浸潤，腹膜炎，胸膜炎，痔疾，脱肛，虚弱者の感冒

処方番号：189　　**処方名**：補肺湯（ほはいとう）

処方構成：
麦門冬 4、五味子 3、桂枝 3、大棗 3、粳米 3、桑白皮 3、欵冬花 2、
生姜 0.5-1（ヒネショウガを使用する場合 2-3）

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下のものの次の諸症

効能・効果：
せき、しわがれ声

原典：千金方
出典：

解説：
浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』に「この方は麦門冬湯の一層咳嗽甚だしき処に用いる。寒さが背から起こり、口の中に霜や雪を含んでいるようになるのが目的となる。肺癈（結核）で熱症がないときに使うことがある。甘草乾姜湯と似ているので参照すべきだ。一説に、頭頂が冷えて咳する人に使うと言っている。（意訳）」と記されている。すなわち麦門冬湯の適応症よりはのどの感想が著しいものに用いられる。甘草乾姜湯は陰虚証の適応であるから、身体が冷え、泡沫状の喀痰があるものの処方である。本方は陽証で虚実間証に用いる。

189.補肺湯

参考文献名		麦門冬	五味子	桂枝	大棗	粳米	桑白皮	欵冬花	生姜	乾姜	鐘乳
千金方　巻十七肺風	注1	1升	3両	2両*1	100枚	1合	1斤	2両		2両	
	注2	4両	3両	2両*1	10枚	5合	1斤	2両	3両		3両
方苑	注3	1升	3両	2両*1	100枚	2合	1斤	2両		2両	
中国大辞典	注4	3銭	1銭	3両*1	2枚		2銭	3銭		3銭	
診療医典		4	3	3	3	3	3	2	2		
処方分量集		4	3	3	3	3	3	2	0.5*2		

*1　桂心　*2　乾生姜

注1　治肺気不足，逆満上気，咽中悶塞，短気，寒従背起，口中如含霜雪，言語失声甚者，吐血方，右八味㕮咀，以水一斗先煮桑白皮五沸，下薬煮取三升，分三服。

注2　治肺気不足，心腹支満，欬嗽喘逆上気，唾膿血，胸背痛，手足煩熱，惕然自驚皮毛起，或哭或歌或怒，乾嘔心煩，耳中聞風雨声，面色白方。

注3　治肺気不足，逆満上気，咽中悶塞，短気，寒従背起，口中如含霜雪，言語失声，甚者吐血方千金。

注4　治肺胃虚寒欬嗽，清水煎，温分三服。

処方番号：190　　**処方名**：補陽還五湯（ほようかんごとう）

処方構成：
黄耆 5、当帰 3、芍薬 3、地竜 2、川芎 2、桃仁 2、紅花 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱なものの次の諸症

効能・効果：
しびれ、筋力低下、言葉のもつれ、頻尿、尿漏れ

原典：医林改錯
出典：

解説：
「半身不随、口眼歪斜、言語蹇渋（なやみしぶる）、口角流涎、大便乾燥、小便頻数、遺尿失禁するを治す」本方は脳血栓に特に効ありとて、香港の陳太羲氏が「漢方の臨床」誌（11 巻 9 号）に寄稿されたものである。わが国ではめずらしい処方である。臨床では脳血管障害、脳血栓に用いる。

190.補陽還五湯

参考文献名		黄耆	当帰	芍薬	地竜	川芎	桃仁	紅花	用法・用量
漢方診療医典		5	3	3	2	2	2	2	
臨床応用漢方処方解説	注1	5	3	3	2	2	2	2	
中医処方解説	注2	30～120	6	6	6	6	6	3	*1
漢薬の臨床応用	注3	30～120	6	5	3	3	3	3	*1

*1 水煎服

注1
・半身不随、口眼歪斜、言語蹇渋(なやみしぶる)、口角流涎、大便乾燥、小便頻数、遺尿失禁するを治す。
・脳軟化症、脳血栓に用いる。

注2
・脳卒中の後遺症で、顔面神経まひ、半身不随、言語障害、膀胱直腸障害などを呈し、元気がない、息苦しい、舌質は淡白で胖大、脈は虚などの気虚の症候をともなうもの。
・血瘀で気虚を呈するもの。
・脳出血、脳梗塞、脳血栓、脳軟化症、小児まひ、頭部外傷などの後遺症で、気虚を呈するもの。

注3
・脳卒中による半身不随に使用するが、意識がはっきりしていて体温が正常のときだけに適用するものである。
・脳出血のときには、出血が止まり、脈が軟弱であることを確かめたうえで使用すべきで、出血が止まっていなかったり、脈が浮で有力のときには用いてはならない。

処方番号：191　　**処方名**：奔豚湯（金匱）（ほんとんとう・きんき）

処方構成：
甘草 2、川芎 2、当帰 2、半夏 4、黄芩 2、葛根 5、芍薬 2、生姜 4、李根白皮 5-8（桑白皮でも可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、下腹部から動悸が胸やのどに突き上げる感じがするものの次の諸症

効能・効果：
発作性の動悸、不安神経症

原典：金匱要略
出典：

解説：
原典である『金匱要略』には「奔豚の病は、少腹より起こりて、上って咽喉を衝（つ）き、発作すれば死せんと欲して復（ま）た還えりて止む。皆、驚恐より之を得」と奔豚気病の病態を記している。すなわち、精神的につよいショックを受け（驚き・恐れ）て発症するもので、その症状は下腹部から違和感がおこって上に昇り、咽が締め付けられるような感じになったり、ひどい場合には失神してしまう。しかし、一連の発作が治まれば平常な状態に戻るというものである。そして本方の目標として「奔豚気、上って胸を衝き、腹痛、往来寒熱す」と記されている。往来寒熱とは発熱と悪寒が交互に起こることである。

『勿誤薬室方函口訣』には「此方は奔豚気の熱症を治す。奔豚のみならず婦人時気に感じ熱あり、血気少腹より衝逆するもの即効あり」と記されており、女性の血の道でホット・フラッシュなどを伴う精神身体症状に広く応用できることが示されている。本方には当帰・芍薬・川芎という補血剤が配剤されていることから、血の道に有効であることは容易に理解される。

奔豚湯（肘後）（191A）との鑑別は、熱感を伴い、より実証のものには金匱要略の奔豚湯を、虚証で熱感がなく、胃腸虚弱のものには肘後方・奔豚湯を用いると良い。

191.奔豚湯(金匱)

参考文献名		甘草	川芎	当帰	半夏	黄芩	葛根	芍薬	生姜	乾生姜	李根白皮	用法・用量
漢方診療医典		2	2	2	4	2	5	2	4		5	
漢方処方応用の実際	注1	2	2	2	4	2	5	2	4		5	
臨床応用漢方処方解説	注2	2	2	2	4	2	5	2		1.5	5	
新版漢方医学〈創元医学新書〉	注3	2	2	2	4	2	5	2	4		5	
症候による漢方治療の実際	注4	2	2	2	4	2	5	2	4		8	
経験漢方処方分量集	注5	2	2	2	4	2	5	2	4		5	
改訂新版漢方処方集		2	2	2	4	2	5	2		1.5	5	*1
新撰類聚方	注6	2	2	2	4	2	5	2	4		5	*2
漢方薬入門	注7	2	2	2	4	2	5	2	1		5	

*1 水800を以って煮て200に煮つめ日中3回夜1回に分服。
*2 原方は日中3回夜1回分服である。

注1
・不安神経症、ヒステリー、一種の婦人科疾患など。

注2
・ノイローゼ、神経質、ストレス病、血の道、ヒステリー、自律神経不安定症などに応用される。

注3
・心臓神経症(心臓血管神経症):古人が奔豚と呼んだ病気は今日のヒステリー性の心悸亢進や心臓神経症にあたるので、発作時に下腹部から何物かが突き上げるように感じ、心悸亢進、胸背痛、呼吸困難などのあるものによい。

注4
・物に驚いたショックによって、奔豚の発作を起したものを治する。
・ヒステリーに用いる機会がある。

注5
・下腹部から胸に向って動悸が衝上げてゆく感じがし、腹痛往来寒熱するもの。

注6
・ノイローゼ、神経質、血の道症、更年期障害、自律神経不安症、ストレス病等で腹動強く起り胸中につき上げて狭搾圧迫感を起し或は頭痛肩こり混昏倒等を起し寒熱を発するもの。

注7
・発作性の腹痛がおき、下腹部から胸に何かつき上げるような感じがして、一時的に失神状態になるとき。